

これまでの議論のまとめ

内容

1 個性に応じた多様な学びが、希望する進路へとつながっていく高校教育を実現するためには、どのような方策が有効か？	3
(1)高校教育の質を確保・向上させながら、どう多様性に対応していくか。	3
①地域（都市部、中山間地、島嶼部等）の特性	3
②学びたいことの多様性と規模感	3
③アドミッションポリシーの確立	3
④通学区や地域外入学制限をどう考えるか	6
⑤教員の多忙解消、教員の確保と研修	7
(2)社会や時代の要請に対応した高校教育の保障	9
①先端的な科学技術 ▲	9
②ICT化	9
③グローバル化	10
④高い学術的志向などへの対応	11
(3)多様な個性や志向性と高校で学べることとのマッチング	12
①スポーツや芸術 ▲	12
②学習や適応の困難（障がい）がある場合のインクルーシブな対応	12
③定時制や通信制の在り方	12
④学びのセーフティーネット	12
2 地域資源を活かし、地域活性化にもつながる島根ならではの高校の魅力化・特色化を進めるためには、どのような方策が有効か。	13
(1)地域資源を活用した特色ある教育内容・教育方法の工夫	13

①PBL（地域課題解決型学習）、教科横断的授業、体験型学習（直接経験）の重視	13
②地元の人との親密なコミュニケーションを通じた学び.....	13
(2)少人数のメリットを活かしたきめ細かな指導	15
①一人一人の能力・関心・志向に応じた教育方法や指導体制	15
(3)これまでとは異なる「学びの成果」の示し方	15
①身についたことの手応えが得られる教育	15
② 教育成果の見える化と発信	16
(4)「そこにしかない教育」の価値創造のための地域社会との連携	17
①地域社会参画型の学校運営	17
②校種の垣根を越えた地域型連携教育の視点（一貫教育）	17

1 個性に応じた多様な学びが、希望する進路へとつながっていく高校教育を実現するためには、どのような方策が有効か？

(1)高校教育の質を確保・向上させながら、どう多様性に対応していくか。

①地域（都市部、中山間地、島嶼部等）の特性

- 都市部というのは具体的に松江市と出雲市を指しているのか、もう少し広い範囲なのか。リーディング・スタディーとして浜田市エリアと江津市エリアの議論をしたが、このエリアはどの地域の話なのか。
- 島根の高校を一括りであるべき姿を出せる部分もあるかもしれないが、地域によって異なる部分もある。地域の捉え方をぼんやりさせたまま議論を進めるよりは、軸をはっきりさせたほうが良い。
- 都市部と島嶼部・中山間地と一番違うのは、例えば、中学生側から考えると、進路選択に一定の幅があるということ。島嶼部であれば島に残るか出るかという選択の話になり、松江市内であれば、どこの高校に行こうか、普通科高校か専門高校か、公立か私立かという選択肢がある。
- 地域をどう括るかという議論はあるが、それぞれのエリアの中学生にとって望ましい分け方で、中学生の進路選択の幅を考えることが大事である。
- 進路の一番の決め手は、本人の希望以外に、通学ができる学校、寮へ入らなくても通学ができるということ。

②学びたいことの多様性と規模感

- 各校の教育目標が可能になる教育方法、どういう学級編制が良いのか、どういう個別指導ができるのか、そのための人員配置をどうするか、柔軟な教育方法がとれるようなやり方を考える必要がある。

③アドミッションポリシーの確立

- アドミッションポリシーでは、教育の仕組みから言えば、こういう力がつくから、こういう力をつけたい人に来てほしい、こう言わなければいけない。
- 高校入試の在り方で、生きる力を測る部分が十分であったかという点については残念に思うところがある。面接、論文、いろいろな行動の記録等で測っていたとは思いますが、今改めて生きる力が高校でも問われていて、大事にされている。
- それぞれの高校によって、何を指すのか、言ってみれば何を育てるのか、生徒の側から言えば、ここに来ればどんな自分になれるのかといったような個々の目標まで、一定の階層に分けて考えていく必要がある。

- 大学ではアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーを明確に出すと聞いているが、高校でも当然必要であり、どういう生徒を育てていくのか、その目標に対してどうなったのかを明確にすることが今後求められる。
- 入試選抜が多様化する中、育てながら入学生を受け入れる育成入試も、今後検討する必要があるのではないかな。
- アドミッションポリシーという表現が子供たちや保護者に伝わる表現なのかどうか分からないが、子供たちにとっての進路選択を考えたときに、各学校の特色の明確化、見える化は大事である。
- 普通科高校の場合は区別感がないので、例えば、医師とか、看護師だとか、薬剤師だとか、医療関係だけとは限らないが、そういう進路を重視している学校だと、そういう人材を育てるということをアドミッションポリシーと言わないと、中学生にとってわかりづらい。
- 学校の特色というよりは、ここに来たらこういう力が身につくという、生徒にとっての価値を打ち出していく必要がある。
- 教員の多忙感の問題とも関係があるが、カリキュラムのスリム化をしないと特色化はできない。あらゆる教科の単位を全て取得させて、どこを受けても大丈夫なようにするといったことをやっているのと、多忙感は減らないし、そのための人員も必要になる。高校に限られた資源（教員数や設備等）の中で思い切った専門化、重点化、特色の明確化を行うということは、「この高校に来ると他にはないこんなことができる」と言うかわりに、「これはできない」と言うことにもなるだろう。
- アドミッションポリシーは大事だが、余りにも突出したことをすると、生徒たちの選択肢を逆に失くしてしまう危険性もある。高校は、小・中・高あるいは大学を経て社会人になるというプロセスの中の一つであるという捉え方が大事である。
- 高校がこんな生徒に来てほしいと伝えるほど、中学生はそれに応えるだけの自分の確固たるものを持っていないと選べない。選択する力をつけなくてはいけない。
- この高校を選んだことで自分が何を選んでいるのか、どういう選択肢につながるのか、中・高・大の役割分担の中で社会に向かっていく姿が見えると良い。
- 普通科高校で特色を出せというのは非常に難しく、まず1つは、中身の見せ方。上手に生徒の活動の様子を見せることは、受験を考えている中学生の心を引くことにはつながると思うが、それは見せ方の問題であって、実際中身はそう変わらない。だから、特色づくりということは、イコール教育の中身を変えるということ、そこを覚悟してやるかどうかということだと思う。
- 出雲高校に理数科が設置された時に、大社高校は理数科をつくらずに、体育科をつくった。当時の校長は、理系は普通科でもいけるので、体育系の教員、警察官そして消防士をつくる学校として体育科をつく

ったという説明をしている。40代、50代以下の出雲地方の警察官の大半は大社高校出身であり、役割を果たしている。

- 普通科高校では教育課程のつくり方に大差がないので、文言の上で特色があるように書いても、教育課程は変わらないという話になるが、それで良いのか。

合科的に教育を行うようにといった次期学習指導要領に向けて、国の高大接続システム改革の中で、どういうテクニカルな工夫ができるのかという問題を研究する必要があると思うが、県でも特色のある教育課程を研究しながら取り組んでいく必要がある。それは何のためかということ、どういうところに行きたいかについての目標値を明確にしながら、特色のある教育課程をつくっていく。それによってアドミッションポリシーが特色化されて、中学生にわかりやすくなる。ここに行ったらほかではないこういう時間をこういうことに使えるというつくり方をして、従来の教育課程のつくり方とは異なる工夫がどのくらいできるのか、これをやらないと特色化という話はどうしても看板だけということになりかねない。

- 学校方針を誰が決めるかという問題がある。校長も教員も異動する中で、誰が責任を持って学校の方針を決めるのか、結構難しい制度設計なのではないか。

- 教育課程を中学生にわかってもらうには、この進路を希望するのであればこういう勉強が必要で、この勉強の中身の柱としては、例えば化学や物理を勉強しないといけないといった、中学生にもわかるように教育課程を伝える努力が必要である。もう少し学習の中身を中学生にどう伝えるかという努力は高校側にあったほうが良い。

- 中学生の進路選択の中で、競争意識が足りないとの認識が示されていたが、高校の校長の間でも競争意識が極めて薄いという話が出てきた。1校しか受験できないので、比較的合格できる高校に出願をした生徒が多数見受けられるという話でもある。要は、高校入試をどのように考えるかという問題が反映される可能性があると思う。内申書・学力検査の可否判定の割合が、専門高校は比較的内申書の比率が高い。競争原理、ハードルを越えていく話からいうと、どうだろうかという気がしている。

- 先ほどの情報発信として高校の学校説明会、オープンスクールなどがあるが、平日に開催されるため、学校説明会になかなか参加することができない。オープンスクールも生徒主体である。子供が最終的には進路を判断するが、親の情報としてはパンフレット、子供が見聞きしたもの、そこに通っている生徒の保護者から話を聞くというだけになる。それでアドバイスと言われても、なかなかアドバイスができない、どうしても昔のことを中心に話をしてしまう。最終的には子供の判断ではあるが、家庭の金銭的な問題、やはり通学費等が必ず発生するので、子供だけの意見でここに行きたいと言われても、なかなか、わかりましたと言うのは難しい状況にある。

- 大学に進む生徒、すぐ社会に出ていく生徒、そういった層がある中で、すぐ社会に出る生徒たちにつけるべき力も考えていく必要がある。

○“子供たちの選択肢を広げる”という視点で考えたとき、各高校がもっとわかりやすく、自分の高校の魅力を発信していただきたいと強く願う。

求める生徒像が、どの高校も似たり寄ったりで、特色が全く伝わってこない。もう少し各校が魅力的に情報発信してほしい、生徒に伝えてほしい。オープンキャンパス、学校説明会、決まり切ったことが毎年行われているが、その点も改革するときではないか。オープンキャンパスのときに部活動見学等があるが、学校説明会時に、在校生と触れ合う場がもっとあっても良いのではないか。

○いろいろな地域にいろいろな高校があるが、どの高校に行っても、必要な教科の力とか、身につけるべき学力がつけられるようにあってほしい。例えば定員の関係で化学の先生が減になれば、進路選択にかかわってくる。県内どここの普通科高校に進学しても、必要な教科の力、身につけるべき力が付くと良い。

○魅力を発信する中で、先生の負担の限界を超えて生徒を集めると、学校間の競争が過多になり、おかしくなると感じた。小学校・中学校・高校・大学の中の高校という役割を私たちは考えて提案しないと、過当競争になってしまう、みんな疲弊してしまうおそれがある。その役割というのは、生徒の成長過程における役割分担があり、地域の中での役割分担もある。高校にはこういう役割が必要だということをしっかり定義づけしないと、先生も苦しいし、何か不幸なことになるのではないか。

○何かの目標を達成するためにはハードルを越えることが必要であり、そのあたりの意識が薄れてくると、将来社会に出てからもいろいろな面で影響が出てくる。ある意味、強い子供たちを育てていかなければいけないと強く思っている。例えば卒業して3年で離職といったところにも影響が少なからずあるのではないかと思っている。やはり諦めないで、ハードルを越える、目標に向かっていくためにはこのハードルを越える、人を蹴落とすのではなく、自分に勝つ、そういう強い子供たちをたくさん育てなければいけないと感じている。

○専門高校の在り方は、島根の産業、島根の10年後、20年後の未来の産業を支えていけるような高度な人材を育成する意味で島根らしさを出す一つの大事なポイントである。高校卒業後すぐに地域で働かなくても、技術をもっと磨くために専門性の高い進学をするということも当然あり得るが、そこでミスマッチは起きてほしくない。その辺の、子供が来ないからといって、一般化に向かっていくことがいいのか悪いのか、少し考えてみなければいけないと思う。

④通学区や地域外入学制限をどう考えるか

○子供たちが今後の進路選択をしていく上で、希望する進路に進むために学ぶことができる高校を選んでほしい、その選択肢を広げてあげたいというのが保護者の願いである。

そうしたときに、まず1つ、通学区の問題があるが、松江市内の現状を考えると、この通学区が本当に必要なのか常に疑問を感じている。例えば東高の校区の生徒は、かなり遠くから通ってくる。松江四中校区の生徒の保護者と話していても、通学の距離(時間)が長く、子供たちが大変な思いをしていて、子供たち

の負担を感じる場面が多い、といった話がされている。通学の距離に限らず、本当にこの通学区の在り方が、子供たちの選択肢を広げているのかと考えると、疑問である。

○もし通学区を撤廃したら、特定の高校に志願者が集中する可能性があるということが書かれているが、当時、少なくとも松江3校は、いわゆる等質等量の教育を行っており、通学区制は意味があるという結論だったと思う。それを現時点でどう考えるかという課題ではないか。

○等質等量であることそのものを今問題にしている、同じようなアドミッションポリシーを掲げるのであれば、今後の子供の人口を考えると3校も必要かということになる。違う意味での魅力化という言葉が使われたが、独自のアドミッションポリシーを出すということ、本当は独自の魅力ある教育課程を持つということに多分なる。教育課程の独自性を出さないと、普通科高校だから、大学受験を基本とする文系、理系の教育をしていきますということであれば、3つの学校が同じようにあるということにしかならない。

○松江市内には普通科高校3校、松江市立女子高校の4つの選択肢があるが、住んでいるところで学校が制限されることについては、もう少し自由度が大きいほうが良いと多くの人が思っている。また、3校あるということで、競争意識、切磋琢磨という気持ちが少し薄れているかもしれない。オープンにして自由に選ばせる、選べることが子供たちの気持ちを高めることにつながるのではないかと思っている。

○昔であれば定員の枠に対して生徒の数が多かったので、偏差値的な意味での競争が自然に起こっていた。それに対して、今は、そういう競争はなくなったが、自分の設定した目標や課題に向かって、自分の挑戦心というか、そういうものを持たなければいけない時代になった。こういうことが学びたいからこの学校に行く、そのために今、この学校で求められている力を自分の力で積み上げていく、そういう目標設定が必要になる。

○平成29年度入試制度改革は、選択肢を広げることが提案された新しい入試制度だったと思う。ただし、一部分では広げたようではあって、例えば松江市内の理数科2校と普通科3校で、明らかに選択肢の不具合が起きている、不公平感が生じている事実もある。そこらあたりがやはり、自由度を上げる、通学区をもう少し広げるあるいは無くす、そういった形で解消できるのではないか。

○通学区について、中学校からの要望にもあるように、かなり制約があり過ぎると思っている。全国的に見ても、松江市の通学区は特異なケースであり、高校は義務教育ではなく、いろいろな選択をして次の道に進んでいくステップの時期だと思うので、この制限については、アドミッションポリシーを各高校が明確にして、そこに向かっていけるような方向性にすべきではないか。

⑤教員の多忙解消、教員の確保と研修

○学習指導要領に指定されている学習内容そのものが大幅に減ったわけでもないのに、逆に思考力・判断力・表現力を求める、あるいは新しい学習指導要領では、一方通行で教えるよりもアクティブに学んでい

く方法をとらなければならないとなっていて、現場の先生の苦労が新たな形でふえていくだろうということとは容易に想像できる。

- 教育現場、先生の負担を少しでも取り除く。子供たちが健康でハッピーであるためには、夢をかなえるためには、一番身近にいる先生が心身ともに健康であることがとても大事なことである。
- 学校のシステム、プログラムをオペレートする主体は教員である。教員をどう育てるのか。人事を含めてどう配置するか、どう採用するか、どう研修するか、そのあたりを加えて考えていかないと、ミッションがふえて教員がパンクするということが起こりかねない。
- 教員はすごく忙しく、100時間超の残業をしている教員もいる。ICT関連や課題発見・解決型学習には、すごく時間と手間がかかる。思考力、判断力、表現力をつける教育を研究するには、教員の定数をある程度増やす必要がある。教員にスーパーマンになりなさいと言っても、時間的、物理的な制限がある。
- 高校の教員が少ないと常々感じている。小・中学校では普通学級で特別な支援の必要な生徒が増えていく。その生徒たちを高校へ送り出すときに、中学校から高校へ丁寧に情報を伝えているが、高校側は忙しいからか、特別に支援の必要な生徒のフォローができていない。高校に進学したがやめて、ほかの学校に移ったり就職したりする生徒が何人も出ている。これからそういう生徒を出さなくするためにも、高校の教員を増やす必要がある。
- 生徒にとって学校で一番影響力があるのは指導者、教員である。教員が忙し過ぎて生徒と向き合うことが難しいということであれば、生徒にとって不幸である。お金のかかることで大変だとは思いますが、教員を増やすことも島根らしさとして発揮できることではないか。
- 教員に負担をかけるのはいけない。大事なのは教員を増やすということではなく、教員の本来の力が発揮できる環境を整えることである。
- 教員が本来の能力を発揮できる環境をどう整えるかという点において、教員の数を増やすということもあるし、必要のない仕事を減量する、地域や他の者が担えることもあるかもしれない。そういうことも含めて、役割分担とか減量とか、いろいろなアプローチを考えていかないといけない。
- 学校は、やろうと思えば本当に際限がない、そういう仕事だと感じている。負担感に資料や報告書の作成があったが、生産的に先生の仕事から外せそうところがカバーできると良い、フォローがあると良い、それによって先生の力がいろいろなところに広がっていくのではないかと感じた。
- 高校の場合、教科の中に科目がある。世界史を専門とする先生が地理を教える、物理を専門とする先生が生物を教えるといったことが、どうしても学校によって出てくる。大規模校であれば、専門が異なる科目を教えるとか、受験指導するということはあり得ないが、小規模校ではそういったことが生じる。人事異動で必ず中山間地に行くので、当然、教材研究が大変だという先生が出てくる。部活動で負担が強いというのは、自分の専門ではない部活動を担当する先生にとっては、やはり負担感が強い。高校、大学で経験

したことがある部活動を担当している先生は比較的やりがいがあり、負担があっても、あまり多忙だという意識を持っていない。生徒指導については、県教委の指導もあり体制を整えて行っているので、1人で抱えて大変だということは比較的少なくなっていると思う。ただし、生徒によっては、いろいろな悩みや問題を抱えているので、そういう部分で負担を感じている先生はいると思う。

○国の議論の行方が、公立の義務教育学校を中心に展開されているが、島根の高校の問題を議論する上で、やはり多忙感を解消して、本来業務に良い気持ちで向かうために、一定程度、いわゆる教育の本筋でない業務をサポートする人材を投入することを考えていただきたい。それから、業務効率を上げるためにICTの活用を図っていただきたい。地域の外部人材を活用することも必要である。

○校務分掌には、教務、生徒指導、相談、進路指導といった様々な領域がある。積もり積もるとどれも大変で、負担感が強い先生もいる、なかなか一律に内部改善することは難しい面がある。どの会社も恐らく同じではないか。

○専門教科教員の確保というのは、工業や水産では若い人が余りいない。例えば工業では、特に機械の先生が足りなくて、退職された先生に講師として勤めていただいていると、工業の校長から聞いている。県教委でも尽力しているが、景気との関係もあり難しい。水産の場合、全国で先生が動くので、どこかの県に転勤するとなると、必ず水産の先生を1人どこかの県から連れてこないといけないという現象が起こっていて、相当苦勞している。

(2)社会や時代の要請に対応した高校教育の保障

①先端的な科学技術 ▲

②ICT化

○今後、小さな地域で生徒を育てていくこと自体に、大きな魅力はあるものの、場を広げることも必要であり、ICT機器を使うことで、いろいろな可能性を見出していくことができる。

○高校に進学した生徒と話す機会があったが、「近隣の高校へ行ったら、ICTは進んでいない」と話していた。島根県の高校は大変遅れているのではないか。

○佐賀県の県立高校では、入学するときにタブレットを1人1台買っている。1台8万円超するが、個人負担が5万円ぐらいで、あとは県が負担している。小・中学校でも、8割ぐらいの学校で、1人1台持っている。これからの時代、アナログと併用しながらICTを活用し、生徒の意欲を伸ばしていくことが重要である。

- ICT教育一般に言われることだが、子供たちが何でもかんでも座って調べようとするが、こうした実体験の欠如こそ学力低下のもとではないかという意見も最近出てきているので、そのあたりがどうなのかを今後考えなければいけない。
- ICT化という場合に2つの意味合いがある。1つは、学校の施設や情報網、例えば校務支援システムなどを機械化する場合、もう一つは教具を機械化していく場合の2つがある。これを一緒に論じると混乱するが、後者の部分で話をすると、タブレット活用は、通常学級における個別学習や特別支援教育で確かに効果的だということが報告されている。ただ、今後、機器等がバージョンアップしていくときに、予算、財源的に対応できるか。少し大きな自治体になると財源がなかなかついてこない部分もあるのではないか。また、現場で、例えばタブレットがフリーズしたときに、そういう処理を誰がどうやってやるのか、そんなことに担任が気をとられてやらなければいけない場合もあるのではないか。
- 授業でタブレットを過度に使うことについて、個人的に思うところがある。確かに立体的な映像を示すには大変有効だろうと思うが、例えば教師が教師自身の言葉で、教具の工夫を伝えなくなる心配があるのではないか、そういった弊害もあるし、それから教材研究がいわゆるソフト研究や器具の活用能力を向上させることに移行していく心配があるのではないか。自分が指導するのではなく、わかりやすい説明を探し、それを主張させるといった感じになるのではないかと危惧している。トータルとして、生徒も在宅で通信教育を受けるようなイメージがもたらされるのではないか、サテライト講義みたいな形にならないように、効果は効果として生かしながら、そういう点にも十分注意をしていく必要がある。
- 校務支援システムをICT化していくということは非常に良いことで、長時間勤務のこととも深くかかわってくるだろうと思っている。松江市も出雲市も単独整備したが、全県同一に整備していく必要がある。

③グローバル化

- インターネットの発達によって、海外に行くことばかりがグローバル化ではなくなってきた。幾つか目標を決めればできることもあるので、グローバル化に力を入れる高校があっても良いのではないか。
- ホストファミリー募集。海外の生徒を同級生ぐらいの生徒がいる家に泊め、中学校、高校に通わせる。海外の生徒と交流ができるし、海外から来た生徒も日本の文化、生活を味わえる。
- グローバル教育で大切なのは、国際社会に対応できる人材をどう育てるかということだと思う。英語がしゃべられるということだけではなく、外国人としっかりと向き合い、日本のこと、島根のことをしっかりと伝えることができる、そういう人材を育てる必要がある。
- 専門高校に海外から留学してくる生徒はいないか。日本の専門高校は意外と技術力が高いのではないか。しまね留学という話がある中で、本当の意味での職業高校に留学するといったこともあっても良い気がする。

○しまね留学として東南アジアからの高校生を狙うというのはどうか。もちろん言葉の問題やお金の問題もあろうかと思うが、今後、日本が抱える人材不足の課題を考えたときに、そういったところに県として手をつけておくことは大事なことはないかと思う。

④高い学術的志向などへの対応

○理数科教育そのものは、倍率が今回下がったからということだけではなく、50年前に設置したときと社会的な使命も多分変わってきているので、リニューアルするとしたらどういう意味でリニューアルしたら良いのか。逆に言うと、理数科だけではなく、ほかに設置が望まれている特色のあるコースもあるのではないか。

大学入試と緊密にかかわっているので乱暴な議論はできないが、これまでどおり文系、理系のような言い方をするのか。理数科ではないものを考えるとしたら、「探究型」という学科の設置も必要かもしれない。

○理数科は設置して50年たっているが、1つは、今やっている探究活動とか、外部とつながった教育のいわば先駆けであり、そういう意味で、理数科の価値はあり続けた。それが今、理数科以外でも探究的な活動が始まり、外とのつながりができていることから、変わらないのではないかという考えが出てきたのではないか。これまでの歴史の中で、全く価値がなかったということではなく、むしろ今のような動きを理数科は先導してきた。もう一つ、SSHのような特に理系に特化した授業を導入する際に、理数科が設置されている学校は非常に取り組みやすかった点で、理数科の価値はそれなりにあった。

理数科は3年間クラスが変わらない。そこがまた高校の3年間を同じクラスで過ごすという、理数科らしさを醸し出してきた。

○今まで理数科は大きな役割を果たしてきたが、今後、もう少し子供たちが挑戦しやすい名前というか、コースというか、そういうものを考えていく必要があるのではないか。私学であれば医学部挑戦コースといった名前かもしれないが、もう少し違った、例えば学問的な探求心を育成することを軸にする、それも、世界を視野に入れた大学進学とか、世界を視野に入れた大学院を目指すとか、そういうところまで行けるコースを作るとか。どういう名前にするかはともかく、もっと違うイメージのコースもあって良い。

○理数科について、松江北、松江南ということではなく、通学区の制約を取り払うという前提で、どちらかの高校に理数科を一元化して、2クラスにし、理数科の中でも切磋琢磨ができるような環境を整える、あるいは、理数科の中でも最初から最後まで理数ということではなく、文系に移っていく生徒もいるので、そういう生徒にも対応した環境を整える。それから、出雲高校のスーパーサイエンスハイスクール、スーパーグローバルハイスクールの取組を参考に、そういった学習の仕方もできるのではないかと思うので、松江市では集約しても良いのではないか。また、先生も特化した人材が集められるのではないか。ただ

し、松江北、松江南、松江東、それぞれ伝統校なので、思い切った変革はやりにくいとは思いますが、これだけ生徒数が減る中で、やはり思い切った変革は今後必要になる。

(3)多様な個性や志向性と高校で学べることとのマッチング

①スポーツや芸術 ▲

②学習や適応の困難（障がい）がある場合のインクルーシブな対応

○通級指導が高校でも整備されることも踏まえながら考えていくことが必要である。

③定時制や通信制の在り方

○（全日制の）普通科高校や農業高校ではない（定時制・通信制の）高校で学びたい人たちの進路を保障することも大事である。島根の子供たちが通学できる範囲で学び続けられる環境を整えることが大事である。

④学びのセーフティーネット

○社会への出口に近い高等学校という視点で、社会から求められていることと、子供自身が希望する進路のマッチング、その部分をどう考えていくのか。地域の方たちの意見も聞いて、マッチングができる仕組みをつくることが大事である。

○多様な魅力的なコースをつくるのは良いと思うが、つくればつくったほど、選択を間違えた時のセーフティーネットをどうするかも同時に考えておく必要がある。

○個々の生徒の進路希望とか、途中で変更が生じたときに、補講、補習を実施している高校はたくさんあり、限られた人数の中、先生にとって大変だと思う。特に中山間地の高校ではそういう特異な進路希望の生徒がいると、例えば教育課程の中に化学はないが、この生徒の進路希望をかなえようとする、化学を教えなければいけないため時間外に指導するといったことはよくあると思う。個の進路指導に応じて、途中から柔軟な指導ができるような余裕のある教員体制を準備しておくことも必要で、お金の話になるとは思うが、それができるから都会地から魅力化に取り組んでいる高校に来る面もあると思う。必ず片方でセーフティーネット、もしうまくいかなくなったときに補いができる教員体制や教育体制をとることも大事である。

○島根県での専門高校の在り方というのはすごく大事なことだと思う。しかし、保護者の立場で考えたときに、高校を選択する子供にとって、初めての選択であり、専門高校を選ぶことは結構大変なことだろうと

思っている。専門高校即社会（就職）といった感じがあり、選択をすごく考えるところがある。ミスマッチングの防止や共通科目の実現は、子供たちにとって重要だと感じている。

- 一つの学校の中で、多様な選択肢を用意するという議論の他に、入試の問題とかかわりがあるが、転学科、転校ということもある。生徒が少なくなったこの時代に、ミスマッチと感じた生徒の将来を考えたとき、この問題をどこかで考えなければいけない。入り口はここだから出口はここに決まっているとすると、進路の選び直しができなくなってしまう。

2 地域資源を活かし、地域活性化にもつながる島根ならではの高校の魅力化・特色化を進めるためには、どのような方策が有効か。

(1)地域資源を活用した特色ある教育内容・教育方法の工夫

①PBL（地域課題解決型学習）、教科横断的授業、体験型学習（直接経験）の重視

②地元の人との親密なコミュニケーションを通じた学び

- 総合的な学習の時間が入ったとき、今までやったことがなかったため、教員に戸惑いがあった。総合的な学習の時間の成果についてはいろいろな評価はあるが、子供たちは確実にかつての教育とは違った力をつけてきていて、それが今の生きる力であると思っている。

- 家庭での教育において、ポジティブな意味での辛抱を身につけることは大切だと思っている。何か問題にぶつかったときに、「あっ、だめだ、私にはこれは無理だ」とすぐ思うのではなく、様々な角度から物事を見る力、ポジティブに考え物事を見ることが出来る力を身につけてほしい。そういうことが身につけば、学校や社会に出て、課題に向き合ったときに、生き抜いていく力のひとつになるのではないかと思う。

- カリキュラム全体を体系化し、どう関係づけていくか。それぞれの科目がどう関係し、どう関連づけていくのか、次の教育課程の作り方の一つのポイントである。

- 抽象的な記号（言語や数式）やモデルが扱えるようになる、それも大事な能力だが、現実の社会で生きていくときに現実に人々とかかわって、現実の問題を解決する力をつけるためには、直接体験は大切である。

- 地域課題研究とかPBL型のことをやれば、学ぶ意欲が高まって学力が伸びるだろうと考えているが、従来型の学力の保障も必要である。

- いわゆる島根らしい教育、島根県らしさという問題を考えるときに、やはり実体験教育というのが島根県らしさになるのではないか。各地域の自然、文化、歴史、産業、暮らし、あるいは人々、そういったリアルなものを学習材料にしながら学んでいくことが高校教育の中でもしっかり行われていることが、都会ではできない教育の一つなのではないか。都市部、中山間地魅力化校ということにかかわらず、こういった実体験を上手に取り入れていく教育も高校の教材の一つに考えていただきたい。
- 実体験は非常に大事だと思う。ほとんどの生徒が東京をはじめいろいろな地方に高校卒業後、大学等進学のため出ていく。「島根に帰ってきて」という話があるが、何も実体験をせずに、例えば宍道湖のきれいな夕日ですら、勉強ばかりして見てこなかったような生徒が果たして島根に帰ってくるのだろうか。都会に出て、ふるさと自慢をするときに、島根には何も無い、それが自慢だという話になる。そうではなくて、県外に出る前にそういった実体験を多く積み重ねることにより、将来的にみんながふるさとに戻ってくる、ふるさとを自慢する、そういったことにつながると思うので、非常に大事だと思う。例えば県立美術館からのきれいな夕日も知らないまま県外に出ると、そういったきっかけがないまま県外へ出ることになるので、県立施設を有効に使い、いろいろな実体験を多く積み重ねるべきだと思う。
- 私の暮らしている地域の県立高校も、コーディネーターを配置し、地域に出て探求的な授業に取り組み、頑張っている。地域の者として、生徒が町に出て、島への思いを高めつつ、学んでいる姿を見るのは非常にうれしい。先生は授業の組み方、進め方のところでは関わっているが、主にコーディネーターが地域と学校をつないで頑張っている。コーディネーターが1人入ったことで先生の意識も変わり、生徒たちの思いも変わってきた。人材がそこに入ることの大きさを感じている。特に、離島なので、主に4年で先生は異動する。それは当たり前のことかもしれないが、離島出身の先生が長く勤務してくれると、そこら辺も変わってくるのではないかと思うが、現状ではなかなかそうはいかない。そうすると、やはりコーディネーターのような人が学校に入る、人の力が加わるということは大きいと思う。
- 地域で触れ合った人たちによって、子供の気持ちが変わってくる。親がどうのこうのという前に、地域の人たちと学校でどうかかわったかにより、子供は育っていく。
- 本当に生徒がなりたい大人の姿を見せることがすごく大事である。
- 人とのかかわり、地域とのかかわり、学校、地域の連携がとれること、同じ目標に向かうことが、子供たちも同じ方向に向かわせることにつながる。
- 松江市立女子高には観光文化コースがあり、その高校が何をしたいのか上手に発信されている。そのおかげで、地元企業としてその学校とともに、地元の高校生たちの成長(経験)に関わることが出来ると気づけた。そして、私たち地元企業は女子高の生徒たちと一緒に商品創りをしようというひらめき、観光文化コースの生徒たちと一緒に、半年間をかけて観光土産のお菓子を商品化し、実際に売り場で販売を開始している。各校が上手に魅力発信することで、地域とつながり、ともに島根の高校生たちの成長をサポートすることが出来る。

(2)少人数のメリットを活かしたきめ細かな指導

①一人一人の能力・関心・志向に応じた教育方法や指導体制

- 先生あるいはコーディネーターが何かを新たに始めようとしたときに応援してくれる、それが少人数の良さである。部活と勉強の両立ができるのも支えがあるから、地域のまち親が支援してくれる、少人数、小規模の良さである。
- 人数が多くなると、一人一人に対してしっかり向き合うことができなくなり、生徒が自立心なり自分で目標を持ったり、挑戦したりということが一般的にできなくなりつつある。
- 全部が全部1クラス30人にする必要はないと思うが、そういう教育が受けられる学校もあって良いのではないか。生徒としっかり向き合えるというところにもつながってくる。
- 生徒を個にしないことが大事である。個にすると、モチベーションが下がり、いろいろ違う方向に行ってしまうことがあるので、個にしないことが少人数では実現できる。
- クラス規模について、40人は少し多い感がある。どれぐらいが良いのか、35人、30人、あまり小さくてもいけない。30人ぐらいが適当ではないか。
- いわゆるアクティブラーニングを本気で進めるのであれば、大人数ではなく少人数に分ける必要がある。
- 子供の成長過程の中で、成長期にあまり近過ぎてもどうか。島根県内どこの学校もだんだん学級数、生徒数が減ってくる中、全部が少人数学級の学校になっていいのかということは、別問題。基本的な部分で考える学校と地域活性化の観点で考える学校との線引きを考えなければいけない。
- 少人数のメリットとか丁寧さとか、そこにしかないとか、とても丁寧なことも大事だが、もっとダイナミックな、たくましさとか切磋琢磨とか、そういった反対の立場の視点も持って考えることも大切である。
- 魅力のある高校とは、自分の地域の学校で自分の夢をかなえることができること、夢を追っていけると、と考える。

(3)これまでとは異なる「学びの成果」の示し方

①身についたことの手応えが得られる教育

- 魅力化の本質は、生徒としっかり向き合える環境なり条件をつくっていくことである。そのことによって、生徒がつかんでいるもの、例えば挑戦心や自立心、つまり自分の中に育てるべきものが何かということを生徒自身がわかっていく。
- 自分たちの手で何かをやるというシーンをつくるのが、それ以外の教科の学びにも何がしかの影響を及ぼしている。学びに対する構えが地域活動を通して醸成されるのではないか。

○何のために学ぶのか、生徒にしっかり伝えていく教育を行う必要がある。今の学びが、将来、社会に出たときにどうつながるのか、少しヒントを与えながら自分の学びの目標を持たせる、それが、ひいては学問に対して興味を持つことにつながる。また、「社会に出てから3年で離職」という問題も解消されていくのではないか。

○ICT教育、グローバル化等、時代に応じた知識の取得も必要となるが、知識だけではなく、“辛抱”などの心の強さや、柔軟さを身につけることができる教育を望む。子供たちが自分らしくいられるために、その個性を伸ばし、自分自身で選択していく力を身につけていくことができる教育が必要である。

② 教育成果の見える化と発信

○キャリア教育をやったから学力が伸びたというデータを見たことがない。その点は、評価のことも含めて理論構築をしていくことが必要である。

○学力観とか高校の3年間で何をどこまでやるべきなのかということがポイントになる。当然ながら学習指導要領に縛られてはいるが、ただ、そこで求める結果がセンター入試の点ではないということだけははっきりしている。

○高校のパンフレットの中に必ず進路実績として国立○パーセント、私立○パーセント、短期大学、専門学校○パーセントと記載されているが、これを「この高校での教育の実績」ですと言っている間は、いつまでたってもこれから離れられない。もう少し高校教育の実績というものは、これもあっていいが、これ以外にも示しようがあるのではないか。

○野球部希望の生徒が野球選手に何人なったかが成果なのか。野球をきっかけにここに来たが、それ以外に自分はこんなものを見つけて、こんなものをつかんで社会に出ていきましたという、それが教育成果ではないか。

○教科学力を保障するとか大学の偏差値を上げるとか、それは大事だとかそういう議論をしているのではなくて、高い学力とは何かということを議論している。高校生に求められる高い学力とは何か。それは、1つの物差しの上に並べていくことはできなく、一定の広がりがある。それを狭義に考えると教科学力になるし、大学入試センター試験の得点ということになるが、もう少し広く高校生に求められる高い学力とは何か、その高い学力をどの子にも保障していくためにはどうしたら良いかを考える必要がある。

○学びの成果の帰着点を何大学に何人入りましたという話にするのか、それとも、そのことはあっても良いが、もう少し別のことも考えたほうが良いのではないか、そのあたりのイメージは検討しなければいけない。大学入試が変わっても、各大学の序列と価値は変わらないと考えるのか、考えないのか。

○数学、化学、物理学、国語にしろ、それがあべき基礎的知識・技能のどこに結びついたか。教科の学力（得点や偏差値）が高いことが、たとえば思考力や判断力や説明力、あるいは人と協調的にコミュニケー

ションをとる力などのジェネリックスキルに結びついていき、将来にわたって続いていくような「学びの姿」が育っていくことにきちんと結びついていることが重視されている。

- 理数科の教育実績をどう考えるかという問題は、何を捉えればそれが評価できるかという問題でもある。これまで多くは、どこの大学に何人行った程度の話しか出てこないが、そうではなく、その後、卒業生が社会的にどういう領域でどんな活躍をしているかというところも当然大事である。卒業生の実績について、難関校への進学だけで評価されても困るので、もう少し違う捉え方をすることが大事である。

(4) 「そこにしかない教育」の価値創造のための地域社会との連携

①地域社会参画型の学校運営

②校種の垣根を越えた地域型連携教育の視点（一貫教育）

- 高校の魅力化・活性化で非常に残念だと思っていたのは、中心になっているのは担当の教職員の数名で、一番の主体である生徒が、こんな学校にしたい、こんな魅力的な学校に自分の学校をしたいとか、こうしたら自分のためにもっとすてきな学校になるのではないかと、友達のために、あるいは地域のために良いのではないかと発想するところが少なく、一部の先生が考えたことをやっていた。それも全校生徒、全教職員に伝わっているかという点、担当者だけで終わっている現実があった。
- この魅力化の取り組みに価値を感じて、やはり良いとされる先生と、価値はわかるがどうしたら良いかわからないといって距離を置いている先生がいる。その意識がこれから魅力化を考える上ですごく大事だと感じている。
- 地域総がかりで魅力ある人づくりへという、イン、アバウト、フォー、ウィズという段階分けはとてもわかりやすい。小学生は地域でしっかり体験させ、中学生は行動して地域に何か一つでも良いから活動として貢献できる。高校生は、その質がより深くなり、課題に向かうという、そんなところを目指していくのはとてもわかりやすい。
- 地元のことは地元のこと、学校のことは学校のことと分離しているのは本来の姿ではなく、つながっているのが本物の姿である。
- コーディネーターのお金が国から継続的にもらえると良い。コーディネーターと高校の先生と一緒にタッグを組み、魅力化できるのであれば有望で、子供たちの将来に結びつく。
- 生徒が地域に出ていく機会を積極的につくり、高校だけの取組ではなく、地域がその目指すところをきちんとつかみ、いろいろな形でバックアップし、生徒を迎え入れる、自分たちの地域のことを伝える、課題も伝える、魅力も伝えることが大事である。
- 地域が学校を元気にし、学校が地域を元気にしている、そういう相乗効果がある。

- 少子高齢化、それから人口減の中で地域における高校の価値が、特に中山間地域や離島で言われるようになり、町村とのつながりが深くなってきた。県立高校の在り方が変化してきたことは間違いないが、それを島根県の全ての県立高校に当てはめることができるかどうかとは別問題ではないか。
- 中山間地のやり方、都市部のやり方、それぞれを生かして島根らしい高校を作っていくことが大事である。
- 地域活性化と結びついた高校がある一方で、普遍的な価値を追求するような高校も必要である。
- 次代を担う若い世代の人たちに移住・定住の地として選択してもらうために教育を魅力化するというのは違うのではないか。教育と地域創生とが混在して、どちらがメインなのか全然見えてこない。
- 移住・定住とか魅力化というのは、目的ではなく、結果論だと思う。学校の魅力化も、魅力的な学校、教育をつくれれば結果的に子供たちが帰ってきたいと考える。もちろん人生の選択の中で帰ってこない、移住しない子もいる。しかし、移住・定住を目的にしているわけではなく、目的にすると本末転倒になる。魅力的な地域になれば帰ってくる子もいるし、帰ってこなくてもかかわり続ける子もいる。結果の1つとしてあらわれてくるという関係性ではないか。
- 魅力的な地域とか教育というのは、生徒にとっての魅力を考えて、地域だったり学校だったり、地域に暮らす一人一人の大人自身が魅力的でないと実現しない。そういう意味で魅力化を実現していこうと思うと、私たち大人一人一人が実際に理解し、一緒にやっついていかないといけない。
- 魅力的な地域とか教育というのは、離島や中山間地域だけの話ではない。魅力とか地域を愛せみたいなことを子供に強要するのではなく、大人と一緒に魅力的な地域とか愛せるような地域をつくるのが大事である。
- 魅力化を進めていく上で、地域出身の先生とかその地域に思いを持った先生がどれだけいるかということも、大きなポイントだと感じている。そういった教員採用のシステムとか、各地域で教員志望の子供をどれだけ育てていけるか、採用枠など変えていけないか。
- チームとしての学校、チーム島根としての学校づくりというか、ここに島根らしさというものを盛り込んでいくことを考えていければありがたい。地域とつながる、地域にかかわる、人とつながるというのが、私の中では島根の良さと思っている。小学校では本の読み聞かせボランティアがあり、地域の方が関わっているが、そういった部分で地域の方がボランティアとして関わる、また、たくさんの元気な高齢者の生きがいとして学校に来てもらいお手伝いいただき、何かそういったところをうまく盛り込んで、島根らしい、チームとしての学校づくりができると良いと感じた。
- 魅力的なあるいは未来の産業につながる教育をやろうと思うと、最先端の高度な専門性をわかりやすく教えることができる人材が要る。そのときに、県が単独でそういう人材を雇用することも必要かもしれないが、一定程度外部の高い専門性を有した人材を活用する方法もある。江津工業の近くにはポリテクカレッ

ジがあり、簡単ではないかもしれないが、人材活用という意味であれば、そういう交流もできるし、それこそ島根大学の工業関係の人材を使うとか、地元のさまざまな人材を活用していくことも考えて、魅力ある教育にしていくというやり方もあるのではないかと思う。

○いわゆる6次産業化的なところが、島根らしいかはともかくとして、今後求められている産業の在り方でもある。そういうセンスを身につけて卒業していくことは、農業でも商業でも何をやっても大事なところではないかと思うので、例えば地域に農業、水産、商業があるなら、ある程度共通の科目を設定する、共同で授業ができる体制を作るといった工夫ができるかもしれない。農業だけ、工業だけということではなく、6次産業化の時間をお互いにアイデアを出し合い、アクティブラーニングを実践する時間をつくることも必要かもしれない。

○隠岐の島町には隠岐水産高校があるが、地域の基盤産業を支える人材を輩出する学校であり、地域を支え、海を生かした教育活動を展開している。魅力的な実習をやっていて、缶詰は非常に人気があり、地域の方も楽しみに待っているし、島外から来るお客さんにも人気がある。隠岐高校には商業科があり、商業にかかわる勉強をしているが、隠岐養護学校の生産実習も含めて、学校間で連携をとり何かおもしろい教育活動が展開できると良いのにといい話を島の中ですることがよくある。

※ 浜田市・江津市エリアにおける県立高校の可能性

- 普通科、専門学科とも、石見部全体での位置づけの中で議論すべき
- 時代的な要請、生徒の進路志向、地域ニーズなどを踏まえた議論が必要
- これまでの枠組（工業、商業、農業など）を超えて構想することも必要
- 中高一貫など高校教育の新たな枠組についても研究が必要
- 選択肢を増やすという観点から、新たな学科のカリキュラム研究も必要